

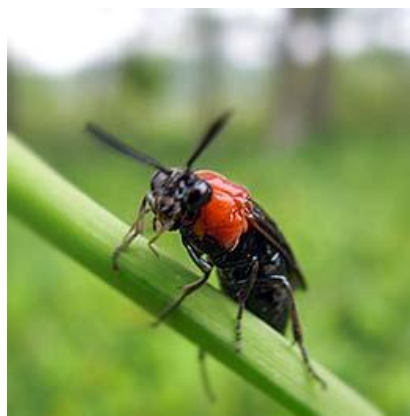
月刊 やちまなこ

2015.8.15 発行

No. 213

8 月号

釧路湿原国立公園 塘路湖エコミュージアムセンター（あるこっと）だより



湿原散歩

急に風が吹き、上空を黒い雲が覆い始めた。しばらくすると雷鳴が聞こえ、怯えるように鳥の一群が飛び去り、湖面の白波は数を増す。午前中の穏やかな湖の景観は午後になり、まるで豹変したように荒れ狂う。滝のような雨が降った瞬間、稲光が音を伴い、対岸の丘に落ちた。

コッタロ川と湿原のほとりから

182 8月のコッタロ湿原便り

コッタロ在住・中本 アキ子(文) 中本 民三(写真)

残暑御見舞を申し上げます。

朝の気温13℃、日中もせいぜい25℃止まりのコッタロで猛暑や熱帯夜を体感することなく季節は、お盆を待たずして秋の草花を咲かせ始めました。一方、湿原の緑一色に見える北ヨシの上には早くも黄色い白樺の枯葉がはらはらと舞降り、沢山のクルミの実もコロコロと落ちているではありませんか。

ところで私共夫婦が「生き方」を180度変える為、47才でこの地に初めて降り立ってから20年の歳月が夢見る如く流れましたが、未だ旅路の途上にある様で、この記念日を祝うと同時に“二昔生きて8月1日哉”。移住当初から続けてきた植樹で繁茂した庭の林に集まる野鳥の種数と数の多さに目を細め乍ら、レコードで弦楽四重奏曲“ハイドンの「鳥のうた」聴く初秋哉”に心の安らぎを覚えつつ、21年目を歩み出しているところです。又、同様に続けてきた池造りの結果、大、中、小の庭池ではビオトープ効果が如実に現れて、大型水鳥である丹頂のみならず、今季初の『迷鳥』カラシラサギが舞降り、日常見なれたアオサギと異なり、“丹頂の白より白く輝けるカラ白サギの舞姿哉”に見惚れてパチリ！水辺の食物であるミミズや蛙が豊富な証でしょうね。

さて、先の6月号に記した早とちりの誤算でがっかりしていたエゾシマリスの番に何と、子リス4匹が誕生していて、突然7月12日午前8時30分巣穴を囲っている木積みの上にわらわら飛び出してきた後すぐにバードテーブルのエサ箱を見つけ、ヒマワリの実を食み、水をのみ、はたまた豊作のスグリにありついておりました。中の1匹の尻尾があまりに短いのでパチリ！一つ箱の仲良しコンビもついでにパチリ！予想外に食べ尽されたのは畑のエンドウでした。昨年の3倍の作付けで、来年用の種採りを期待していたものの、膨らみかけた豆の部分のみを、どこ迄も探し求めて毎日々々朝から夕暮れ時迄食んでいたのです。それで解ったのが“シマリスの好物告げる夏野菜”と云うわけです。今では、すっかり食みとられて枝葉のみとなっているのが“完熟のスグリたわわにみのる枝しならせて食むエゾシマリスは”。面白いのはお親で、悲しいかな5月の交尾日以外全くの御役御免の彼は、子育てに参加出来ず、母親に追いつかれるので巣にも近付けない一人ぼっち。知ってか知らずか子リス達も、エサ場で母親と出くわすすぐに追いつ追われつの繰り返し。只今ここは子リスワールドに変ぼうしており、6匹用に7つのエサ箱を設えて歓待中！



湿原の住人たち その173

アリスイ

アリスイは夏鳥として渡来するキツツキです。一年を通して釧路湿原で見られる他のキツツキの仲間は、木の幹に垂直に止まりますが、こちらはスズメなど小さな鳥のように横枝に止まります。全身が褐色と黒と灰色、背中に黒い帯があり、この複雑な模様が保護色になっているようです。和名は主にアリを食べることに由来し、漢字では蟻吸と書きます。まもなく南へ旅立ちます。



バードカービング展を開催。

レクチャールームに於いて、平成26年度自然ふれあい行事「バードカービング講座」の参加者17名の作品を展示しました。釧路湿原の冬鳥「マヒワ」をモデルに作り、講師の沢田正雄さん指導のもと、昨年10月から今年2月までの間、角材を削りながら、頭や胴体、翼、尾などの部分を仕上げて彩色して木の枝などに固定して完成させました。躍動感のあるものや番など、講師の作品も含め、個性あふれる作品に来館者も関心を寄せていました。



土器を焼いて完成。



7月12日に開催した「土器作り講座」で作った土器を今月7日に野焼きをしました。焚き火の周囲に置き、更に乾燥させて表面が濃い紫色に焼けたころ、火床に土器を並べてその上に薪を積み、一気に焼きました。燃え盛る炎を注視しながら、やがて火力が落ち始めた灰の中から土器が顔を覗かせましたが、輻射熱が強くそのまま1時間ほど経ってから回収しました。徐々に冷え始めた土器の表面はレンガ色や灰色に変色し、独特な仕上がりとなり、参加者の親子は「やったあ～夏休みの作品が出来た」と喜んでいました。

つぼっちの塘路湖周辺うろうろ日記 Vol.81「農村環境整備が生んだ?! 新たなフィールド」

8月となり夏休み期間の訪れと共に家族連れの観光客が増えてきました。塘路市街では夜半に電灯を回り、クワガタやカブトムシ探しをする人が見られます。現在標茶町ではミヤマクワガタを始め7種のクワガタがいますが、近年ではカブトムシも見られます。かつては移入種として、道南を中心に北海道型と呼ばれる小型で角の小さなカブトムシがいましたが、今や釧路地方でも堂々たるカブトムシを見つけることができます。

本来釧路地方にいないはずのカブトムシは国内外来種です。寒さに弱いカブトムシが生息できたのは、冬期間保管されている堆肥の中などで幼虫が越冬できた為ではないかと考えられています。周辺環境に影響を及ぼす堆肥は、法律整備に伴い平成16年頃より屋根付きコンクリート製の堆肥舎が設置されるようになるなど、保管に際し対策が取られてきました。これは河川と湿原を守る上でもとても重要なことです。しかし一方では年中温暖な場所を生み出したのかもしれない。海外産甲虫も盛んに売られている今、難しい問題です。

坪岡 始（標茶町郷土館学芸員）

